

教育研究所だより



令和3年12月1日 NO.91



伝えることの難しさと子どもから学んだこと

学校教育課 課長 田中 寛

先日、家で片づけをしていて、私が新採の頃に購入した本を目にしました。大村はま先生の「教えるということ」です。久しぶりに読み返しながら、いろいろなことを考えました。

1つ目は、「伝えること」の難しさについてです。

今の職においても、会議等で挨拶をしたり、説明をしたりする機会がありますが、「言葉で思いを伝えるということの難しさ」を感じる人が多いです。

私が言葉で説明する時に気を付けていることは、「誰が聞いても知っている言葉や例えを使う」ということです。例えば、学校の教員ですと、「板書（黒板に文字や図等を書くこと）」は共通の言語として通用しますが、行政の方が集まる会議等だとわかっていただけないことが多いのではと思います。話の内容から、「黒板にかくことやな。」ということは推測できると思いますが、すぐにはピンとこないかもしれません。そうならないように、日頃から気を付けているつもりですが、長年の習慣から口に出していることがあるかもしれません。

これは、保護者と話をする時でも同様だと思います。みなさんもちょうとご自身のことを振り返ってみてください。

2つ目は、「自分の教員としてのスタイルや考え方はどうやってできたのか？」というこ

とです。教員になってからのことを振り返ってみますと、やはり「教室での子どもたちとのやり取りを通して学んだ」ということにつきますと思います。もちろん研修等で身に付けたこともありますが、断然子どもから学んだことが多いと感じています。新採の頃は、「なぜ、隣の学級の先生は、あんなに上手に指導ができるのだろう？」「同じ教材を使って教えているのに・・・。」とよく考えていました。今から思うと、「最近まで大学生だった自分がうまく教えられないわけがない。」となるのですが、その当時は、「学級の子どもたちに申し訳ないなあ。」と考えていました。

初任校では、6年間で1年生を2回、2年生を3回、3年生を1回と下学年を担当させていただきました。当時は、「他の学年も経験してみたい。」とも考えていましたが、ベテランと言われる年齢になった頃に、「先生は子どもに丁寧にわかりやすくしゃべるなあ。」と言われたことがありました。これは、小さい子どもには難しい言葉を使わずに説明をする必要がありますし、若い頃に下学年を担当させていただいたおかげだと思っています。このような経験をさせていただいたことが、今の自分の教員としてのスタイルをつくってくれたのだと思っています。これまで私に関わってくれた子どもたちに感謝です。

<栗東市教育研究奨励事業>

教育研究奨励事業に関わる「研究の進め方講座及びまとめ方講座」について、今年度は、栗東市教育研究奨励事業スーパーバイザーとして、滋賀大学教職大学院准教授の白石牧恵先生にお願いし、ご指導をいただいています。さらに、1年を通して研究推進や論文執筆のために助言を頂いたり、研究論文の審査にも関わっていただいたりします。そして、まとめとして、教育研究発表大会では全体講評を頂く予定もしています。

先生からは、研究の進め方、まとめ方について、基礎基本を実践事例も交えながら、大変わかりやすく教えていただき、受講者にとって、研究を推進する上で、重要な要素を整理し、より具体的な、より一貫性のある研究を積み重ねる一助となったのではないかと思います。

残りの論文執筆期間が1か月ほどになりますが、白石先生からいただいたご指導を糧にして、一人ひとりの受講者が、大切にしてきた日々の実践を振り返りながら、研究のよりよいまとめをされるだろうと楽しみにしています。

今年度実施しました「研究の進め方講座及びまとめ方講座」の様子を簡単ではありますが、下記に掲載しましたので、参考にしていただければと思います。



研究の進め方講座

5月25日(火)危機管理センターにて

<白石先生のご指導から>

- *日々の保育、教育実践の中に答えがある。
- *具体的な子どもの姿、声、動きに注目し、変容を見取る。
- *子どもの発言や作品、写真などを、記録として残しておく。
- *国、県、市の動向にも目を向けながら、研究の主題(テーマ)と主題設定の理由に、整合性、一貫性をもち研究を進める。

【今日のキーワード】

- 設計図を描く。常にそこに立ち戻る。
- 一貫性、整合性を持つ。
- 具体による説得力を持つ。

参加者の声から

実践事例をもとに、詳しくわかりやすく研究の進め方を教えていただいたので、自分の中で何から取り組めば良いのか、整理することができたので良かったです。研究を進めていく中で、困ったこと、進め方に疑問点が生じた時には、今日の研修で学んだことを生かし、日々の保育に取り組んでいきたいと思いました。

計画書は作ったものの、どこから手をつけようかと悩んでいました。今回の講座で設計図に沿って必要な情報を整理し、まとめることが重要だと学びました。日々の実践の中で子どもの変容が見取れるよう記録に残そうと思います。

何から始めればいいのかとても不安でしたが、毎日の中で私自身が試行錯誤している中に「答え」がある、オリジナリティーを大切にしていくこと、また具体的な記録を残していくことが大切と聞き、さっそく明日から記録をつけたり、試行錯誤していることをメモにとったりしておこうと思いました。



研究のまとめ方講座

10月29日(金)

オンラインにて

<白石先生のご指導から>

- *読んでいる人を説得できるように。
- *随筆や日記、エピソードの羅列ではだめ。
- *自分の成長が実感できたり、意欲的に取り組んだりしたことをフィードバックしてみる。
- *誰もが使える論文にしていこう。

【今日のキーワード】

- 論文を書く目的、意図を明確にする。
- 「伝わる」書き方をする。相手がいることを意識する。

参加者の声から

- 今回の講座で、特に、読み手がいるということ意識することができました。自分の研究の進み具合も踏まえて、これまでにとったアンケートと比較できるように、追加でアンケートを行うこと、板書を含めた授業の様子を写真で記録に残すことを行う必要があると気づきました。これらは、実物や客観的な資料を用いてわかりやすく相手に伝えるためだという理由まで学ぶことができました。今回の講座で学んだことを意識して、今後の授業や研究のためのアンケートの作成を行っていきたいと思います。
- 前回の講座から、具体的な記録を残してはいたものの、具体的にどの手順で進めたらよいか迷っていました。今回の講座の中で、論文を書く上でのポイントを教えていただいたことで見通しがもてました。今まで残してきた具体的な記録の中で、使えるような記録を整理することができました。今後は論文を書き進めていくとともに、不足している記録を残していきたいと思います。初めてのオンライン研修でしたが、わかりやすく、とても身になりました。ありがとうございました。
- 論文を書く時の目的と意図を明確にするとありましたが、書く内容があいまいになっていたのどうしようと考えていましたが、まずは情報を収集して分類をすることによって真に伝えたいものが明確になるとおっしゃってくださったことで、少し心の中でもややが晴れました。ここから、研究論文を書くにあたって記録として残すものを増やしていき、成果として書けるようにしていこうと思います。Meetでも丁寧にわかりやすく教えてくださりありがとうございました。研究をまとめるにあたって大きな力になり感謝しています。

初任者研修 奮闘記③

～就学前保育教育初任者研修編～

11月16日(火)に第6回就学前教育初任者研修を開催しました。

緊急事態宣言があり、中止、延期した回もありましたが、早いもので6回目を迎えました。参加していただいている保育士・教諭の皆さんは、毎日いそがしい日々を送っておられ、1年の半ばを過ぎ、疲れもあるのではないのでしょうか。でも、参加されている様子を拝見しますと、とてもにこやかに講師の方の話に耳を傾けられ、意欲的に研修に臨んでおられます。日々の保育においても悩んでおられることもあると思いますが、一緒に過ごす子どもの姿を励みに奮闘されているようです。

「子どもの主体的な遊びや生活を作り出すための環境の在り方を探る」
講師 京都橘大学発達教育学部
児童教育学科
准教授 青木美智子 先生



- 保育室の環境では、同じ2歳児であるクラスの環境を見る機会がなかったので、改めて気づくことが多くありました。遊びをする際に仕切りがあることで1つの遊びに集中できたり、シールなどで枠を作ってあげることで上履きの置き場がわかりやすかったりして、工夫がたくさんされていて、明日からの保育に生かしていきたいと感じました。
- 環境を考える上で、保育者が子どもの姿を想像すること、子どもの思いや興味関心が反映されているか、子どもそれぞれの発達に応じているか、考えることが何より大切だというお話が印象的で、自分自身どんな思いを持っているのか、どんな子に育ててほしいという願いを込められているか、改めて考え直したいと思うきっかけにもなりました。



図書館司書より先生にすすめたい一冊

『ぼくは川のように話す』

ジョーダン・スコット／文 シドニー・スミス／絵 偕成社

ある日、吃音のある少年におとうさんが言いました。「あれが、おまえの話し方だ」見ると、川の水はあわだち、うずをまき、様々な動きをしながら、どうどうと流れていきました。

自然のあるがままの姿に心を救われた少年の物語。あなたの話し方は何のようですか。 《図書館 清水優》



『おひめさまになったワニ』

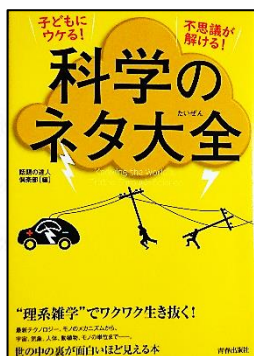
ローラ・エイミー・シュリッツ／作 福音館書店

「りっぱな女王になるように」と、ひめは毎日、勉強や運動に追い立てられています。ある日、もういや!と妖精に訴えたら…ワニがやってきて、ひめの身代わりになってやりたい放題。そこでやっと目が覚めた大人たちは、ひめの声に耳を傾けはじめます。大人に立ち向かう子どもの気持ちを応援したくなる本です。《図書館 大矢真由美》

『おとうとは 青がすきーアフリカの色のお話ー』

イフェオマ・オニエフル／作・写真 偕成社

お姉ちゃんのンネカが、弟のチディに色の名前を教えます。赤は大おじさんの帽子の色、緑はヤシの葉っぱの色、ピンクは庭に咲く花の色…。青が好きなチディは、どんな色が気に入るでしょう？アフリカのくらしの風景を、子どもの目を通して紹介します。日本の色とはまた違う、アフリカの色と文化の豊かさに、触れてみませんか。《図書館 大矢真由美》



『科学のネタ大全』

話題の達人倶楽部／編 青春出版社

新型コロナウイルスの「コロナ」の意味は？3秒ルールって実際どうなの？あずきバーはなぜ固い？などなど。毎日のHRに、子どもとの交流に、知っていたら「おっ」と思われること間違いなしの小ネタ数百個を掲載。これであなたも一夜にして科学博士になれる…かもしれません。《図書館 清水優》

